様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３７３０５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｈ０１５８５

研究課題名（和文）＜善く生きる＞ための社会学の基盤構築：亡命知識人の一次資料の国際共同学術調査

研究課題名（英文）International Research Project on Primary Resources of Exiled Intellectuals: On Sociology for "Good Life"

研究代表者
吉野　浩司（Yoshino, Koji）

鎮西学院大学・現代社会学部・教授

研究者番号：４０７５５７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　12,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ロシア東欧からの亡命社会学者が残した社会学の業績を社会学史的研究としてまとめたものである。このような複数国家にまたがる人物群を総合的にまとめる社会学史的研究は、貴重な試みであった。亡命社会学者らが温め続けた思想を一言で言い表すなら、〈善く生きる〉ための社会学ということになろう。それは物質的な欠乏の克服や、豊かさのみに固執する、従来の社会学とは全く違う知の営みであった。物質とは究極的な目的な目標を達成するための、数ある手段の一つに過ぎない。目的はあくまでも、精神的な充足にある。その目標を追い求めていこうとするところに、亡命社会学者たちによる学問的特徴があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ロシアおよび中東欧の社会学は、きわめてユニークで、高い水準を示しているにもかかわらず、日本においては、紹介されることが稀であった。さらにロシア革命後の亡命知識人の業績は、せいぜい亡命先での業績のみが論じられるに過ぎず、その業績が一体どのような経緯で生まれたのかが、ほとんど無視されてきた。本研究では、その欠落部分を埋めるという点で、学術的意義を有しているといえる。また国際学会での発表のほか、海外の研究者を国内シンポジウムに招へいするなど、国際学術交流を行うことができた。

研究成果の概要（英文）：This study explores the contributions of sociologists who fled from Russia and Eastern Europe as a significant aspect of the history of sociology. Comprehensive studies spanning multiple nations on such a group of individuals are rare and valuable endeavors. The ideologies nurtured by these exiled sociologists revolved around a sociology focused on "living well," emphasizing not only material wealth but also the pursuit of spiritual richness. Born from experiencing numerous struggles such as oppression, exile, and adaptation in new societies, their ideas present a sociology that remains relevant to modern times.

研究分野：社会学史

キーワード：社会学史　亡命知識人　ロシア社会学　アメリカ社会学　フランス社会学　ロシア社会学　チェコ社会学　在外ロシア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

社会学はこれまで人間のネガティブな側面を取り除くことに主力を注いできた。実際、現代の標準的概説書のトピックを見ても、犯罪と逸脱、テロリズム、リスク、不平等、貧困、社会的排除などネガティブなテーマが並んでいる。逆に人間のポジティブな側面への論及はかなり乏しい。しかし人間社会には、楽しさや喜び、生きがい、親切、愛といったポジティブな側面も存在する。これらポジティブな側面のメカニズムを解明し、人間社会の福祉に役立てること、これも社会学にとって必要な課題である。ポジティブ心理学やスピリチュアル・ケアなどはすでにそうした研究に着手し始めていた、また、身近な話題としても国内的には県別幸福度ランキングが、また国際的にも国民総幸福量調査などによって、人々のポジティブな社会への関心が向けられていた。しかし、その関心は社会学にまでは浸透していなかった。ただ、アメリカ社会学会でも「利他主義、道徳性、社会的連帯」が新設されたことで、一部、ポジティブな社会構想の試みは始まろうとしていた。同部会が目指していたのは、「科学性」を標ぼうする社会学がこれまでに見失ってきた利他主義、道徳性、社会的連帯を現代世界に蘇らせることであった。

こうした動向の源流を社会学史研究の立場からさぐろうとしたのが、本研究の課題の１つであった。

情報源をたずねるにあたりヒントとなったのは、20 世紀初頭のロシアおよびスラヴ語圏の人文・社会科学にあった。そこには〈善く生きる〉ための社会学の原型ともいえる、「主観派」社会学があった。しかし当初の段階では、この主観派社会学は、ロシア国内では、1917 年から 1980 年代までの社会主義社会学全盛の時代に「ブルジョア科学」として切り捨てられてしまった。そこで本研究で目をつけたのが、国外追放という憂き目にあった亡命知識人による文書である。それらは、手付かずのまま世界各地のアーカイブに放置されているという状況にあった。社会主義崩壊後の学問と思想の見直しによって、それらを掘り起こそうとする取り組みがようやく実を結びつつあった。

こうして、アメリカでの「利他主義、道徳性、社会的連帯」部会の成立と、ロシア「主観派」社会学との関係を、アーカイブ調査により結びつけるという課題が成立した。

２．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀初頭のスラヴ語圏には＜善く生きる＞ための社会学があり、それが亡命知識人により世界各地に持ち出され、断片的に書き残されていることを立証することにある。その上でそれらをグローバルな社会学史の文脈の中で再構成することによって、来るべき＜善く生きる＞ための社会学の構築に向けた基盤整備をすることが本研究の最終的な目的である。

３．研究の方法

明らかにしようとしたのは、下記の３点である。

【１】〈善く生きる〉ための社会学の源流としてのロシア思想を突き止める。

【２】社会主義時代に諸外国へ亡命する社会学者たちも、ロシア時代に〈善く生きる〉ための社会学を構築しようとしていたことを明らかにする。

【３】〈善く生きる〉ための社会学が欧米社会の中に浸透していったグローバルな社会学史の流れを明らかにする。

これらの課題を、出発点のロシア・東欧から経由地・亡命先であるプラハ、パリ、ベルリン、ニューヨークまでの動きを俯瞰できるよう、それらの地域を含む国別の班編成とした。

ただし二年目以降、コロナの影響で、海外渡航が極端に制限されてしまった。そこで調査地の事情に明るい研究協力者として、阿毛香絵氏（京都大学）および中辻柚珠氏（京都大学）に加わってもらい、それぞれフランスおよびチェコに関する資料と情報の提供を受けることができた。

４．研究成果

【注目すべき重要な社会学者】ロシア語圏、フランス語圏、ドイツ語圏、英語圏における、ロシア・中東欧で生まれた亡命知識人の代表となる社会学者を考える上では、P.A.ソローキン、G.ギュルヴィッチ、N.ティマシェフらの業績が決定的に重要であることを明らかにした。彼らの社会学の世界的な規模での新党は、ロシア出身という背景がなければ考えられないものであった。

【注目すべき拠点】ロシア、中東欧、欧米と、広く見渡してみた場合に、ロシアから亡命した社会学者が拠点としたのが、プラハであることが明らかになった。T.マサリクらのロシア人の支援政策によって、ロシア人の大学・研究機関が作られた。とくに重要なのが、プラハのロシア法学部である。上記三人も、そこに所属することで、研究活動を続けることができた。その結果、次なるステップとして、アメリカやフランスでの活躍の土台を作ることができた。

【総括】亡命知識人論というグローバルな社会学史の観点からその源流にまで遡って捉え直すことで明らかになったことは、〈善く生きる〉ための社会学とは、人間が生きる上で必要な生きがい、愛、喜びといった人間のポジティブな側面を対象とし、それを社会に実装することを目的とする科学であるということである。この考え方は 20 世紀初頭のロシア社会学にすでに組み込まれており、それが亡命知識人たちの手により欧米の社会学に広がっていった。

なぜ、そうしたオリジナルな社会を生み出すことができたのか。ソローキン、ギュルヴィッチ、ティマシェフ、ガイガーらを中心とする亡命知識人は、政治的抑圧、亡命、避難、マイノリティとしての適応、国際的な学術的協力などを経て、自らの社会学を構築していった。これらの取り組みは、当然のように、社会問題等のネガティブな側面に焦点を当てるものとなった。しかしそれを超える視点もあった。彼らが一様に経験したのは、きわめて過酷な、それこそ死に直面するような極限的な経験であった。そこには、個別具体的な問題の解決ではなく、その発生源となっている前提を、根源から突き崩す社会学であった。「物質」ではなく「精神」に重点を置くことで、その思考は獲得しうるものである。計量主義、唯物史観の限界を超える視点を有していた。そうした思考方法は、ポジティブな社会学を構想する際には必ず参照すべき社会学史的知見であった。

【研究成果の準備状況】

具体的な成果として、中間報告として、吉野は『利他主義社会学の創造』（昭和堂、2022 年刊行）を出版することができた。本書は研究分担者にも共有され、現在準備中の研究成果『〈善く生きる〉ための社会学』（仮）の土台となっている。予定されているその目次は、下記のとおりである。

序　章　〈善く生きる〉ための社会学とは
第１章　ロシア人たちの社会学・革命・亡命
第２章　チェコスロヴァキアにおける亡命ロシア知識人のネットワーク
第３章　亡命ロシア知識人ジョルジュ・ギュルヴィッチ
第４章　G.ギュルヴィッチからG.バランディエへ
第５章　ティマシェフ〈権力と倫理の社会学〉
第６章　ニコライ・ティマシェフ、亡命の半世紀、そして回帰する社会動態論
第７章　亡命知識人における知識と知識人の意義：テオドール・ガイガーの場合
終　章　社会学による「魂の世話」：ソローキンからトルストイ、そしてプラトンへの遡上

可及的速やかに、これを出版すべく、現在、準備を進めているところである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 吉田耕平	４．巻 765
２．論文標題 【書評】災禍の時代に向き合う行為の理論／対象書：吉野浩司『利他主義社会学の創造』2020年、昭和堂	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	６．最初と最後の頁 87-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉野 浩司，阿毛 香絵	４．巻 20(1)
２．論文標題 亡命ロシア知識人ジョルジュ・ギュルヴィッチの現代フランス社会学・人類学への貢献	５．発行年 2022年
３．雑誌名 鎮西学院大学地域総合研究所研究紀要	６．最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉野 浩司	４．巻 19(1)
２．論文標題 高田保馬の家郷肥前三日月 ： 草花の匂う社会学の誕生	５．発行年 2021年
３．雑誌名 地域総合研究所研究紀要（長崎ウエスレヤン大学）	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉野浩司，吉田耕平，磯直樹，梅村麦生	４．巻 19 (1)
２．論文標題 〈善く生きる〉ための社会学の系譜～スラヴ地域からの亡命知識人が残した遺産と展望～	５．発行年 2020年
３．雑誌名 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要	６．最初と最後の頁 53-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田耕平	4．巻 37
2．論文標題 退歩の観念を葬ったのは誰か――Ｐ・ボウラーとＭ・ホーキンズの進化思想史再読	5．発行年 2020年
3．雑誌名 神戸大学社会学研究会 社会学雑誌	6．最初と最後の頁 145-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梅村麦生	4．巻 37
2．論文標題 ニクラス・ルーマンの時間論	5．発行年 2020年
3．雑誌名 社会学雑誌	6．最初と最後の頁 81-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梅村麦生	4．巻 42
2．論文標題 非同時的なものの同時性 ： 社会学における非同時性の問題について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 社会学史研究	6．最初と最後の頁 91-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoshino Koji	4．巻 3
2．論文標題 Inseparability of Self-Love and Altruistic Love: P.A. Sorokin and E. Fromm	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Human Arenas	6．最初と最後の頁 38～51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s42087-019-00093-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Iso Naoki	4．巻 17(1)
2．論文標題 Points de vue sur l'Algerie : la reception des travaux de Frantz Fanon et Pierre Bourdieu au Japon	5．発行年 2020年
3．雑誌名 al-Masadir	6．最初と最後の頁 309-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梅村麦生	4．巻 27
2．論文標題 <論文翻訳> メビウス シュテファン『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(KZfSS)にみる社会学の歴史(下)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都社会学年報	6．最初と最後の頁 119 - 148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 磯直樹
2．発表標題 存在論的転回と「ネイティヴ」の理解――社会学と人類学の交錯
3．学会等名 日本社会学会大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 梅村麦生
2．発表標題 亡命社会学者としてのテオドール・ガイガー
3．学会等名 第61回日本社会学史学会大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 吉野浩司
２．発表標題 20世紀初頭の亡命ロシア社会学者による文明変動論―P.A.ソローキン、G.ギュルヴィチ、N.ティマシェフを例に
３．学会等名 第39回 比較文明学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉田耕平
２．発表標題 遠方避難地における「町民団体」立ち上げ支援の手法ーー大熊町復興支援員関東事務所の活動を事例として
３．学会等名 日本災害復興学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kohei YOSHIDA
２．発表標題 Nationalized Networks, Self-observing Society, and the Polarized View of the World: The U.S. Social Scientists' War Efforts in WWII and After
３．学会等名 ISA Forum of Sociology
４．発表年 2021年

１．発表者名 Koji Yoshino
２．発表標題 Sorokin as A Russian Emigrant Sociologist
３．学会等名 Питирим Сорокин и парадигмы глобального развития XXI века(к 130-летию со дня рождения（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koji Yoshino
２．発表標題 On Sociology for “Good Life”: The Last Challenge of P.A. Sorokin
３．学会等名 International Society for the Comparative Study of Civilizations（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉野浩司
２．発表標題 亡命ロシア知識人としてのＰ．Ａ．ソローキン
３．学会等名 第59回 日本社会学史学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 磯直樹
２．発表標題 アロンとブルデュー：２つの「革命」の間で
３．学会等名 第59回 日本社会学史学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田耕平
２．発表標題 進歩の観念の変容と社会科学者の社会の時間
３．学会等名 第92回 日本社会学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 梅村麦生
２．発表標題 複雑性の縮減／維持／増大という問題系 ――N・ルーマンの社会システム理論と複雑性概念の検討から
３．学会等名 第70回関西社会学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 梅村麦生
２．発表標題 時間のメディアと形式――ニクラス・ルーマンのコミュニケーション・メディ ア論から考える社会的時間
３．学会等名 第92回日本社会学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 吉野浩司	４．発行年 2022年
２．出版社 佐賀新聞社	５．総ページ数 290
３．書名 高田保馬自伝「私の追憶」	

１．著者名 吉野浩司	４．発行年 2020年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 352
３．書名 利他主義社会学の創造	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	梅村　麦生 (Umemura Mugio) (70758557)	神戸大学・人文学研究科・講師 (14501)	
研究分担者	吉田　耕平 (Yoshida Kohei) (90706748)	鎮西学院大学・現代社会学部・准教授 (37305)	
研究分担者	磯　直樹 (Iso Naoki) (90712315)	東京藝術大学・学内共同利用施設等・特任講師 (12606)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関